



2015年、第5回目の青枢通信は宮本藤雄さんの登場です。

ご存知のように、宮本さんは青枢会の屋台骨・事務局を支える重要なポジションで活躍され、いつもお世話になっています。温厚で誠実・背筋が真っすぐにのびた青枢のジェントルマンであります。

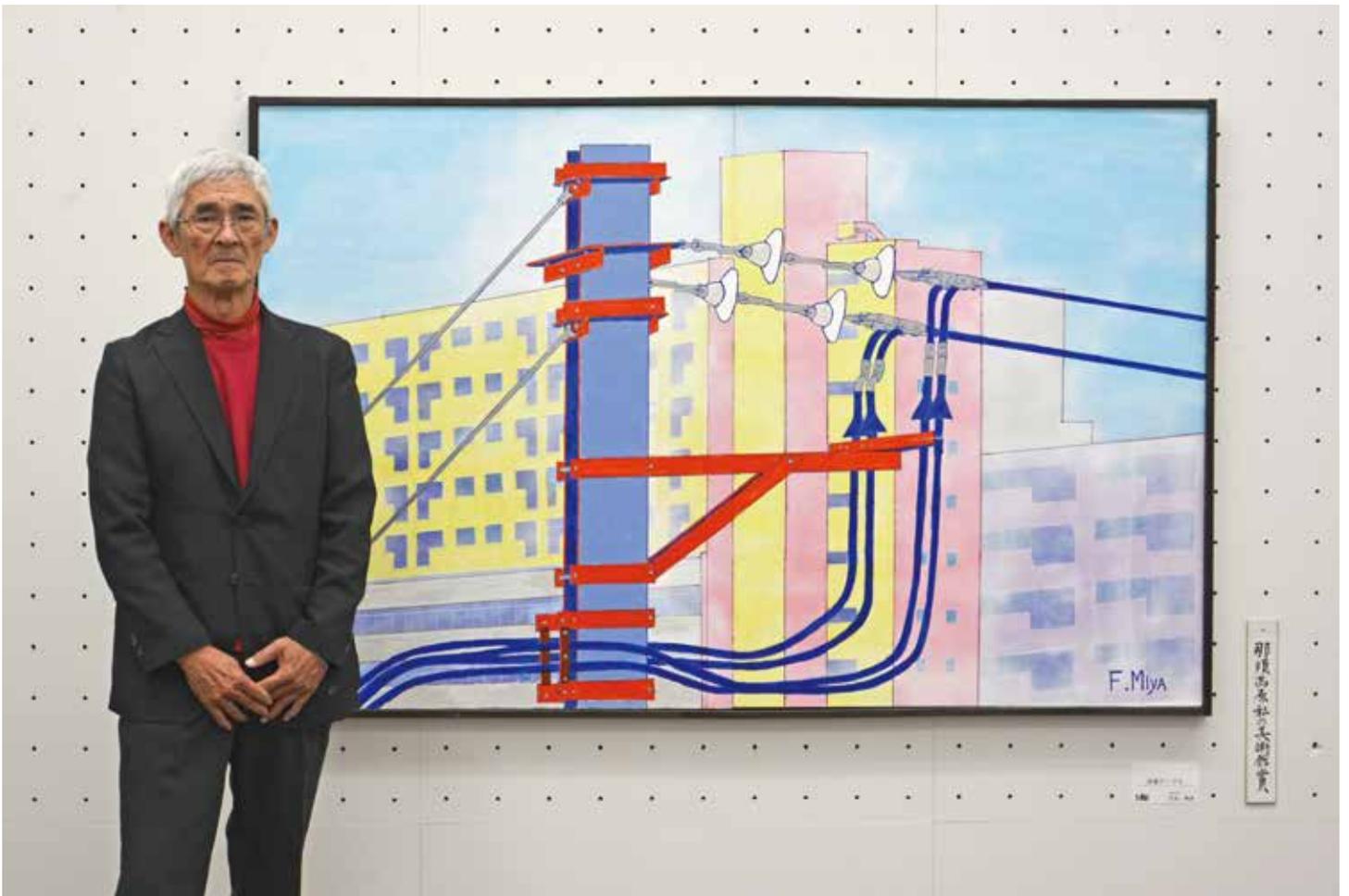
また、会の自由な空気を感じさせる、明るい色調とのびのびとした画風で、毎回描く事の楽しさを感じさせてくれる作家でもあります。

今回は41回青枢展の折、美術館の事務所で私(米谷)が取材をさせていただきました。その時のお話の中から、画家・宮本さんの創作の秘密、根幹に迫れば良いと思います。

第41回展の宮本さんの作品は、掲出の写真にある「送電ケーブル」の作品です。

背景にはマンションか団地でしょうか、よくある高層ビルが描かれています。送電ケーブルというのは、現代的なネットワークを象徴するアイコンである為か、よく現代絵画の作家がモチーフとして描いているのを見かけます。送電ケーブルばかり描く作家さんもいらっしゃいますね。しかし、私が知る限り、そういう作品はリアルな表現がほとんどです。宮本さんのように自由な配色で描かれた絵はあまり見かけません。

この独自のスタイルはどこから出て来たものか？ お話を聞いているうち、それは絵に対する基本姿勢からくるものである事が分ってきました。



第41回青枢展会場にて、作品「送電ケーブル」の前でポーズさせていただきました。さすが、立ち姿が決まっていますね。

宮本さんは21歳の頃から、大手電気素材部品系会社のT社にお勤めになっています。

その前はどのような事をやられていたのですか？とお尋ねしたところ、「18歳から3年間ウェイターをやっていたんです」と。なるほど、それはさぞかし似合いそうですね、絵に描いたようなウェイター姿が想像出来ます。

T社にお勤めになってからは60歳まで、ずっと現場一筋で現場監督をやられて勤め上げられたそうです。

25歳くらいの頃、市の広報で知った「あひるの会」という、国画会の高松健太郎先生が主催されていた絵画教室に通いはじめたのが、絵画制作を始めたきっかけだそうです。その後、30年間も続いたそうですので、大変なものです。

あひるの会は、屋外のスケッチが多く、沢山の風景などを描かれたようです。なるほど、宮本さんの作品は、そのほとんどが風景画だということも納得です。現在はアクリル絵具での制作が多いですが、当時は油彩で描かれていたそうです。

主催の高松先生は、絵の技術的な指導より、既存の絵画団体への批評や政治・文化論などイデオロギー中心の指導をされていたそうですが、やはりそういう時代でしょうか、技術論より精神論が多く語られた熱い時代ですね。

そんな教室に週に一度通い続けられて、単なるリアリズムではなく、自由に感じたままの絵を描く事が今の画風に繋がっているのだそうです。

このあひるの会では、青枢会の事務局長・丹羽さんとの出会いがあり、さらに会員の福島さんや矢嶋さんもいらっしまった事が、青枢への入会に繋がっていったそうです。ここにも運命の出会いがありました。さらに、宮本さんがT社に勤めておられた事で、会社の部下であった画家のSさんが毎年青枢展においてになって、それがキッカケとなり、私（米谷）もSさんに誘われてグループ展をご一緒したりと、出会いの連鎖もありました。ほんとに嬉しい偶然です。

人と人の結びつきというのは不思議なもので、まさに縁・巡り合わせですね。

宮本さんは第27回から青枢展に出品されていますが、初出品から特選を受賞されています。絵画論より人生論、世の中を動かすのは人間であるという高松先生の教えから、独自の画風を築き上げられて、いつも「僕の絵はテキトーだから」と謙遜されていますが、描けそうでなかなか描けない絵だなと感動しています。

海外の風景、特にハワイの絵が多いのも、お聞きしたところ、すでに15~16回くらい行かれていたとか。日頃バイクで出かけられている姿を見知っているの、なるほど精力的に動いていらっしやる宮本さんらしい話だなと感じました。

送電ケーブルやモノレールの絵など、今までの作品と少し異なる視点で描かれたメカニカルな作品が出て来て、また新しい宮本ワールドを見せていただけそうで、これからますます楽しみです。

メタリックでグレーのイメージが強いモノレールも宮本さんが描くとこんなにポップでカラフル。



モノレール F50 アクリル



ビルが全面黄色でビーチがピンク。カラフルで大胆な表現、宮本ワールドの魅力全開です。

ビーチ監視塔 F50 アクリル

ビーチサイドの風景。人々の頭とパラソルまで海と空のブルーに染まって、まさにパラダイスという感じ。配色がとても美しい。見ているこちらまで、和ませてもらえる楽しい絵ですね。



レンタルボード屋 F120 アクリル

編

集

後

記

5回目となります青枢通信。記事を書きながら、その作品を見て（私なりに）分析していると、今まで気づいていなかった作品の魅力や成り立ちにハッとすることがあります。

作品を見るというのは、絵肌表面の様子をただ眺める事とは違うんだなと、今更ながら感じたり、書く事で勉強させてもらっているなと思います。

今後の作品審査などでも、これが生きてくるのではないかと期待したりも…（笑）これからさらにペースアップして、発行していきたいと思っています。

次回もまたお楽しみにお待ち下さい。

米谷